

『好きにされたい』

著：坂井朱生

ill：旭炬

「退屈ですか？」

声をかけてきたのは、この会の主催者だ。いつか話題にもでたショッププランナー、
柕野敬一である。

「柕野様ですね。今日はお招きありがとうございました」

青衣は急いで生真面目な表情をつくり、丁寧にお辞儀をした。彼が年に数回、同世代の企業家を集めて親(しん)睦(ぼく)会を開いているのは知っていたが、津賀までがそのメンバーだとは知らなかった。

今まで、一度も話題にならなかったせいだ。

「ああ、いい。そんな堅苦しい挨拶はヌキ。君のことは知ってるよ、津賀からよく聞いてるからね。有能な秘書さんらしいね。シャンパンはどう？」

「仕事中ですから、アルコールは遠慮しておきます」

「へえ？」

意外、というように柕野が目をやや丸くする。けれど笑んだ口元が、揶揄われているのだと知らせてきていた。

「帰りも、津賀を送らなければなりませんし」

運転をするから、というのは酒を断る絶好の口実だ。

「車なんて放っというて、タクシーで帰ればいいじゃない。あいつも酒入れてんだから、文句なんか言わないだろ」

「仕事で同行しましたので、そうも参りません」

「ふうん。聞きしに勝る生真面目さ、ってやつかな」

ところでさ。柕野は青衣の傍へ寄り、こそりと耳元に囁いてきた。

「君の、津賀を見る目。ぞくぞくするね」

ざくりと身体が強張る。まさか、知られているのだろうか。

「目、ですか」

柕野がどう思っていようと、青衣は青衣の役割をはたすまでだ。というより、この場で、津賀とどういう関係なのかなど、暴きたてられてはたまらない。

「さっきから、ずっと津賀を目で追ってるだろう？」

「……ひどく酔うとか、なにかトラブルがないかと見ているだけです」

「そんな目じゃなかったけどなあ」

「では、どんな目だとおっしゃるんですか」

どきどきと、鼓動が嫌なふうには跳ねあがる。膝が震え、立っているのも精一杯だ。

「そうだなあ。君が女性なら今ごろ、たっぷり濡れちゃってそうだ。そんな目って言ったらわかる？」

「——！」

どうして、そんな。

茫然と言葉を失った青衣に、「ああ、そんなに驚かないで」と、柕野が笑った。

「ご心配なく。津賀の趣味は知ってるよ。あいつがここへ誰かを連れてきたのもはじめてでさ。おおかた、自慢でもしたかったんじゃないの。ていうか、そもそもめったに顔だしてくれないんだけどね」

梶野の口ぶりからして、いつかの男のような、嫌がらせというわけではないようだ。ただ面白がっている、そんなふうだった。

けれど、青衣にとってショックは大きい。関係に気づかれたことと、それ以上に、自分がそんな目で津賀を見ていたと、指摘されたことにだ。

（俺、は——）

とうとう、外の顔さえ保てなくなってしまったのだろうか。もしかして、社内でも知られてしまっているのだろうか。

すうっと、血の気がひいていく。

「どうしたの？」

「……なにか、勘違いしておられるようですが。さきほどの言葉は、聞かなかったことにしておきます」

津賀を欲しがってたまらない目をしている。今日会ったばかりの男にさえ、そんなふうに見えていたのだろうか。顔に表れてしまうほど、露骨に求めているのだろうか。

（だって——）

だって、それは真実だ。梶野が言うとおり、青衣はいつも津賀を欲しがっている。

「あらら、しらばくれちゃって」

「私は津賀の秘書ですから。それだけです」

青衣は堅い声で返した。どれほど露骨だろうと見抜かれていようと、ここで認めるわけにはいかない。青衣が認めないかぎりには憶測にすぎず、津賀に最悪の迷惑はかけずにすむはずだ。

「強情だねえ。だったら、俺が君を口説いてもいいってこと？」

「この場の主催をされているかたですし、津賀のご友人ですから、なにをおっしゃられてもかまいません。ですが、それに私が応える義務はありません」

「参ったねえ、これは難しそうだ。でも、諦めるつもりはないよ。津賀に言って、紹介してもらおうかなあ。あいつがいない場所でなら、本気で口説いてもいいよな」

耳鳴りがする。こめかみがずきずきと激しく痛む。心臓の音がやたらと大きく耳について、それでも、青衣は懸命にその場に立っていた。

「そこまでにしとけ」

「おおっと、ダンナの登場か」

いつのまにか、津賀が近づいてきていたらしい。声が聞こえ、梶野の視線が青衣から逸れる。

（聞かれた……？）

津賀は、どこから話を聞いていたのだろう。助けが入ったというのに、ちっとも嬉しくない。できれば、彼には知られないままでいたかった。

梶野は津賀の知人で、青衣の様子を黙っている保証はない。無駄だとは思いますが、それでも、会話は聞かれたくなかった。

（欲しがってる目、だなんて）

本当に、青衣そのものを表した言葉など。

「阿呆。こいつを揶揄うな、クソ真面目なんだって言うただろうが」

「だって、真面目なところが可愛いんだよ。おまえだってそう思ってんだろ」

「こいつは部下だ」

「まーた、二人揃ってしらばっくれて。おまえまでそう言うの？」

部下だ、と津賀ははっきりと告げた。それは以前、青衣が「上司だ」と言ったのとまるで同じ言葉で、しかもこの場では当然だった。

けれど。——どうしてだろう。胸が痛い。

「俺までって、事実を言ったまでだ」

「じゃあ、俺が口説いてもいい？」

「時間外なら好きにしろ」

津賀が素っ気なく言って、青衣の背中にさりげなく手を添えた。ここから連れだそうというらしい。よほど、ひどい顔を晒しているのだろう。

連れてこられておいて、懇親会の雰囲気壊すとは、役立たずもいいところだ。——こんな人間を、津賀はいつまで雇ってしてくれるのだろう。

いつまで、傍に置いてくれるのだろう。

「おい、淡島。用はすんだから帰るぞ」

「……はい」

用はすんだというのが、本当ならいい。もし、青衣がおかしな表情をしているせいだとしたら、いたたまれない。

「ええ？ もう帰っちゃうのかよ。せっかく来たんだしゆっくりしていけば」

「顔だけだしたんだ、充分だろ。面倒くせえ」

「だったら、淡島くん？ は置いていってよ。もう少し話がしたい」

「そっちは『時間外に』つつたろうが。仕事だっつって連れてきたんだよ」

「時間外ならいい？ ホントに？」

梶野の視線が、興味深げに青衣へ注がれている。今、顔がひき攣ったのを見咎められているのだろう。

「くどい。好きにしろと言っただろうが」

言って、津賀が青衣の背中を押した。彼に促され、青衣も戸口へと向かう。

好きに、か。

(俺がこの人に口説かれてもいいんだ。……そりゃ、そうだよな)

津賀にとって、青衣はその程度の存在だ。上司で部下で、お互いの欲を満たすための相手。それだけのことだ。

上手くやれているとは思う。津賀も、未だに青衣を呼ぶのだから、少なくとも飽きてはいないだろう。

けれど、どうしてもひきとめて独占したいほどじゃない。

(それだけの、ことだ)

それが、どうしてか淋しい。

特殊な性癖をもつ青衣にとって、津賀はあまりにも完璧すぎるからだろうか。けれど津賀にとってはどうだろう。青衣で満足しきれているか、そこまではわからない。

嫌だな。なにを考えてるんだろう。

こんな関係に、発展性などない。いずれどちらかが飽きれば終わりだ。終われば、元の上司と部下に戻る。

戻れるかどうか、わからないけれど。津賀が青衣をクビにするかどうかはともかく、

青衣自身の問題だ。

あんなふうに関わった相手と、はたして平気な顔で仕事ができるだろうか。

「どうした？」

微かなため息を聞きとがめ、津賀が訊ねてくる。相変わらず、聡い人だ。

「いえ、この場の空気にあてられただけです。慣れていないから、少し疲れました。すみません」

「いちいち謝ることじゃないだろ」

その晩、青衣は津賀からの誘いを断り、一人で自分の部屋へと戻った。疲れたと言ったのを本気にとらえたのか、ひきとめられずにすんだ。

青衣が津賀の誘いを断ったのは、これがはじめてだった。

本文 p139～147 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>